

# 都会の周縁に生きる女性たち

——文学作品にみる保姆のありかた——

劉 小俊

## はじめに

保姆とは、一言でいえば家事の手伝いを目的に家庭に雇われる女性を指し、日本語の「家政婦」にあたる。その仕事内容には家事全般のほか、お年寄りの介護や子供の世話なども含まれる。最近「男保姆」が現れ、話題を呼んでいるが、保姆はふつう女性の職業として認識されている。

従来保姆は雇い主の家に住み込み、その家族と生活を共にしながら家事を担うものであり、なり手のほとんどは都市部に住居の確保が難しい農村からの出稼ぎ労働者であった。一方、一九九〇年代頃から、国营企業の改革によって多くの中年女性が「下岗」（レイオフ）に追い込まれた。



長年勤めた工場を離れ、「洗濯、炊事、買い物、掃除の能力しか残されていない」彼女たちのなかには、保姆という職業を選ぶ人も少なくない。もともと都会に生活基盤を持つている彼女たちは、住み込みではなく、自宅から通いながら一定の時間のみ保姆の仕事をする方法を選ぶ。そこで、従来の住み込みに加え、「鐘点工」（パートタイマー）、または「小时工」と言われる保姆の新しい形態が現れた。「下岗女工」の現実を描き、大きな社会的反響を巻き起こした畢淑敏の『女工』に、

世の中には家事専門の職業がある。住み込みの人は保姆、一定時間に働く人は小时工と呼ばれている。

という表現が見られる。このような表現から、同じ保姆という職業でも、住み込みで働く人を「保姆」、自宅から通

う人を「鐘点工」または「小時工」と名づけるのが社会的慣習になっていることが窺える。また、保姆Ⅱ農村からの出稼ぎの若い女性、鐘点工（小時工）Ⅱ下崗女工という社会通念も形成されているように思われる。なお、本稿に言う保姆は前者を指すことをここで明記したい。

中国では専業主婦層がついに形成されていないこともあって、都市部では一般の家庭でも保姆を雇う習慣がある。その背景には人件費、特に農村からの出稼ぎ労働者の賃金が安いという実情もあると思われるが、女性の社会進出がますます著しくなった今日、保姆に対する需要は非常に大きい。北京、上海、広州、成都、西安の五大都市だけでも保姆需要数は約百万人と言われている<sup>(5)</sup>。また西安工程学院の大学生の調査によると、調査対象のなかで、「いざれ保姆を雇うことになる」と回答した人は五七・七%にも上る。

このような調査結果から見れば、保姆は中国都市部の家庭生活の大きな支えになっている一方、出稼ぎの農村女性の重要な職業の一つにもなっていると言える。しかし、現実には保姆という職業に対する社会や人々の理解が十分と言えないうえに、農村出身の出稼ぎ労働者へのさまざまな偏見と差別も加わり、保姆たちはつらい境遇に立たされている。近年保姆や鐘点工（小時工）の日常生活を描く文学作品が多く発表されるようになり、彼女たちの同情すべき

境遇を浮き彫りにし、関心を集めている。本稿は、保姆を主人公とする李肇正の『女傭』と『傻女香香』<sup>(6)</sup>、項小米の『二的』<sup>(7)</sup>を中心に、保姆経験者を主人公とする阿寧の『米粒兒的城市』<sup>(8)</sup>を補充資料として、これらの作品の分析を通じて、今日の中国文学に描かれる保姆のあり方を明らかにしたい。次章ではまず右の四作品のあらすじと作者を紹介し、二章と三章で分析を試みる。

## 一 作品内容の紹介

(一) 『女傭』<sup>(ニゴイ)</sup> 李肇正（男 一九五七—二〇〇三）『当代』二〇〇一年第五期

主人公杜秀蘭は二八歳の主婦、小学校に入ったばかりの息子がいる。夫の杜壮壮<sup>ヂウヂウヂウ</sup>は出稼ぎで上海の建築現場で働いている。「将来息子を大学に入れることを考え」、彼女も現金収入を求めて上海にやってきて、寝たきりの母の介護に金兄弟に雇われ、保姆になる。賃金は月三六〇元。金兄弟はまだ若くてきれいな杜秀蘭に興味を持ち、やがて金銭と引き換えに彼女と性的関係を持つ。そればかりでなく、保険外交員をしている兄は顧客を喜ばせるために、彼らを母の家に連れ込み、杜秀蘭を紹介する。杜秀蘭は悩みながらもお金の誘惑に勝てず、一回最低五〇〇元の場合で

金の顧客の相手になる。金兄弟の母がなくなつた後、杜秀蘭は相当の金額がある預金通帳を持つて金兄弟のもとを去る。建築現場で夫と再会する杜秀蘭は悔恨の涙を流したが、自分のしてきたことを夫に打ち明けなかつた。そして、これから金銭に困るようなことがあつたら、また金兄弟のもとに戻ればよいと心を決める。

作者の李肇正は、高校の国語科教員をしながら精力的に文学創作活動をし、二〇〇三年三月病気のため四八歳の若さで世を去るまで、庶民、とくに生活にあえぐ社会下層部に生きる人々の日常を描く数多くの作品を世に送り出した。そのなかでも、下崗女工の境遇をリアルに描いた中編小説『女工』は、多くの読者を感じさせ、『小説月報』第七回百花賞を受賞。しかし、その作品は、生前文学評論界にあまり採り上げられることがなく、亡くなつた後再評価されるようになった。李肇正の再評価は文壇において「李肇正現象」と言われ、社会の注目を集めている。

(一) 『<sup>シャーニユイ</sup>少女<sup>シヤンシヤン</sup>香香』 李肇正（男 一九五七—二〇〇〇）

(二) 『<sup>シヤンシヤン</sup>清明』二〇〇三年第四期

二三、四歳の<sup>シヤンシヤン</sup>香香は貧困地方と言われる陝西省農村の出身である。五元で男の人の相手をさせる母の強要を逃れるために、一人で都会に出てきたのは中学生の時であった。都会で香香はほかの出稼ぎ労働者とともに危険建築物

に認定された建物を占有し、小さな部屋に身を置きながら廃品収集の仕事をして生計を立てている。ある機会に彼女は同じ団地に住む雑誌編集者の二〇歳年上の劉徳民<sup>リウデミン</sup>と知り合う。そして、劉の妻が亡くなっていることを知り、彼と関係を持つ。香香の目的は劉徳民と結婚し、「城市人」（都会人）になることである。しかし、劉徳民は結婚の意志を一向に示さない。そのうち、香香たちが不法占有した建物が取り壊され、香香は途方に暮れる。道端や駅の待合室に寝泊りする運命を避けるため、彼女は劉徳民の家に押し入り、保姆になると名乗る。劉徳民はやむを得ず彼女を保姆として受け入れる。そして、「すべてのサービスを提供する」保姆として働きながら、香香はついに願ひ通り劉の妻になり、「城市人」になる。しかし、幸せのはずの香香は苦渋に満ちた心境に陥る。

この作品は『小説月報』第一一回百花賞受賞作である。

(三) 『<sup>アルダ</sup>二的』項小米（女 一九五二—）『小説月報』二〇〇五年第五期

『二的』は「二番目の子供」の意味で、幼い頃病気で亡くなった主人公小白の妹である。二六歳になる小白は弁護士聶凱<sup>ニエカイ</sup>旋<sup>シュワン</sup>の家で保姆をしており、月給は五〇〇元。小白が出稼ぎ労働者として都会にやってきたのは十年前、同じ出稼ぎで家具の運搬をしていた父が怪我をし、お金が稼

げなくなつたからだ。聶の妻単自雪は大学法学部卒であるが、専業主婦をしており、夫との仲が悪く、小白にも冷たく当たる。一人で他人の家族と生活を共にしているうちに、小白は聶に好感を抱くようになる。聶も小白の若さと美しさに引かれ、二人は関係を持つ。純粹な小白は聶凱旋が本気で自分を愛していることを信じ、幸せな将来を夢見る。しかし、妻から問い詰められた聶凱旋は、小白との関係を真つ向から否定する。聶凱旋の本心を知つた小白は傷心し、黙つて聶の家を去る。

解放军文芸出版社に勤める項小米は、中国共産党早期の情報要員であつた祖父をモデルに長編小説『英雄無語』を書き、中国人民解放军の最高の文学賞「八一文学賞」を受賞。ほかに『彭門女将』など解放军を題材とした作品を多く出しているが、『二的』という作品は、保姆を主人公にし、弱い立場に立たされる出稼ぎ労働者としての農村女性たちへの作者の関心を示している。

(四) 『米粒児的城市』阿寧(男一九五九) 『北京文学』二〇〇五年第八期

米粒児ミリアルは出稼ぎで農村から都会に出てきた純真な心を持つ若い女性である。彼女は曹老師ツァオの家で保姆をし、主に子供の世話をしている。生活を共にするなか、米粒児は曹に好感を持つようになり、曹も彼女に興味を示す。単純な

米粒児は二人の関係を相思相愛だと思ひ込むが、やがてそうではないことを思い知らされる。彼女は曹の家を去り、美容室で働き、そこで知り合つた男性の紹介で某銀行支店長の愛人になる。そして、自分は高額の融資の見返りとして、マンションと共に支店長に送られた「プレゼント」であることを知らされる。

作者阿寧は河北省を拠点とする作家で、その作品には政治と権力を題材とするものが少なくない。企業における金銭と権力の癒着と、それと戦う共産党幹部の姿を描く『天平話』や、地方幹部の昇進をめぐる出来事を描いた『愛情病』などで注目を浴びている。

## 二 保姆たちの境遇

### (一) 農村における生活境遇

「はじめに」で触れたように、中国の都市部で多くの家庭が保姆バウマを雇える背景には、出稼ぎ労働者の賃金が安い現状がある。このような現状を生み出したのは、急速な経済発展を遂げた都市部と経済発展が遅れている貧しい農村部との間における大きな経済格差にほかならない。本稿が論じる作品の主人公たちは、貧しさがゆえに辛い経験をし、家計を助けるために保姆になつた点で共通している。それ

それぞれの作品に、主人公たちの農村での生活境遇のリアルな描写が見られ、都市部と農村部との想像を超える経済格差と、それに対する主人公たちの疑問が描き出されている。

『少女香香』のなかで、作者は香香の故郷を「見渡すかぎり黄砂地帯で、鬼もなすすべのないところ」だと描写している。瘠せた土地で、人々は懸命に畑仕事をして、トウモロコシの粉と干しサツマイモで生き延びる生活しかできず、現金収入はほとんどない。このような状況のなかで、まだ子供である中学校の女子生徒が現金を稼ぐ重要な労働力になる。

香香が通っていた学校には、まだ中学生なのにお金を稼ぐ女子学生がいた。男と一晚過ゴシして五元をもらうのだ。毎日香香と一緒に学校に行く玲玲はそのなかの一人だ。彼女はお母さんに強いられて、二、三日おきに一晚五元のお金を稼ぐ。「玲玲を見なさいよ。学校に通いながらお金も稼ぐ。おまえも見習いな」と香香は母親に言われた。

五元はペットボトルのコカコーラ一本の値段とそう変わらず、都会では取るに足りない金額かもしれない。しかし、香香の故郷ではわずか五元の現金収入を求めて娘に売春を強要する母親がいる、このことは現実として作品に描かれている。

また、都会に出て廃品回収の仕事をしていた香香は月三

〇〇〇四〇〇元の入りがあった。都会で生活するにはかなり厳しい金額であるが、故郷にいる同級生たちのことを思い出し、「三〇〇元を稼ぐために彼女たちは六〇人の男と寝なければならぬ」と思うと、香香はとても満足する。貧しい農村から来た香香の目には、都会はまるでパラダイスのように映った。拾ってきた不用品——古いベッドや故障したテレビも、彼女にとって「すべて宝物」のように見える。

一方、『二階』の主人公小白も、貧しさがゆえに大好きな学校を中退せざるを得なかったつらい経験を持つ。小白は勉強が大好きで、成績も常にトップであった。しかし、中学校二年の時、弟が小学校に入るため、彼女は学校を辞めなければならなかった。両親は二人分の学費が払えないからだ。小白は毎日草刈をし、刈った草を天秤棒で担いで運び、市場に売り出した。彼女は草を売ったお金で学費を払おうと思ったのである。しかし、一夏、休まず刈った草を売って得た現金はわずか一二元、一八八元の学費を払うには安すぎた。かくして小白の高校に行きたい夢は破れた。

香香と同様、小白にとっても都会の生活は裕福そのものである。しかし、彼女の心には、都会生活への憧ればかりでなく、都市部と農村部の経済格差を不公平に思い、疑問を感じる気持ちもある。雇い主が衝動買いしてまったく着

ようとしなないTシャツが三〇〇元以上もするのを知った時、小白の心に格差に対する疑問が芽生えた。さらに、雇い主に連れられていった旅行先のホテルの料金を知った時、小白は「抑えきれない憤りを感じた」。

一晚だけの宿泊費で、農村の子供が五年間も学校に通えるなんて、運命はなぜこんなにも不公平なの、小白はかつてない思いで胸がいつぱいだった。

また、『女傭』にも次のような描写がある。雇い主の金に乱暴された後、杜秀蘭は五〇〇元を渡された。金がいと簡単に五〇〇元を財布から出したのを見て、杜秀蘭は次のように思った。

五〇〇元は**壮** **壮** (杜秀蘭の夫) が工事現場で一ヶ月間汗を流してやっとの思いで稼げのお金だ。自分が一年間苦勞して收穫する二〇担(千キロ)の米もこのくらいのお金しかならない。(中略)しかし、中から五〇〇元を取り出しても、金の財布の厚みはちっとも**変わらない**。

「金の財布の厚みはちっとも変わらない」という描写から、五〇〇元は保険外交員の金にとってたいした金額ではないことが分かる。しかし、農村出身の杜秀蘭にとっては、一家が請負いする畑の一年分の收穫になる。この例からも両者の収入の格差があきらかになる。

上記の内容から、保姆たちの農村での生活境遇や、都市

部と農村部との経済格差は十分伺えると思う。また、「都会に住む人間の金銭感覚は農村の人とまったく違う」という作品の主人公小白の言葉が象徴するように、両者の経済格差は人々の想像を超えるほど大きい。しかし、その一方、このような格差があるからこそ、多くの農村女性が保姆として働くことが可能になったとも言える。言い換えれば、貧困と経済格差が保姆を生み出す二つの要因になっていることが作品の描写から読み取れる。

## (二) 偏見と差別による精神的な苦痛

前述のように、中国では都市部と農村部の間に大きな経済格差が存在する。そのみならず、現行の戸籍制度によつて、都市市民は「都市戸籍」、農民は「農村戸籍」に入れられ、農村出身の人が都市に移住しても、「農村戸籍」から「都市戸籍」に変更するのは容易なことではない。このようなことから、農村出身者は都会でさまざまな偏見と差別を受ける。特に女性たちは「農民の身分(農村戸籍)」と女性というジェンダーの二重のハンディを背負つて都市部の最下層で生きていかざるをえない現実がある。遠山日出也氏は、その研究報告の中で出稼ぎ先での男女分業の問題に触れ、「たとえば北京では、男性は建築現場で働くことが多いのに対して、女性は、住み込みの家政婦や零細な商店の店員になることが多い。男性は同郷の

者と一緒に働くことが多いが、女性は孤立しがちである」と述べている。本稿が扱う作品には、各家庭に孤立された保母たちが社会と雇い主の家庭から二重の差別を受け、それによつて精神的な苦痛がもたされている現実が浮き彫りにされている。

まず社会の面から見ると、『傻女香香』には次の描写がある。

団地の一番目立つところに、「団地は我が家、防犯はみんなの力で」という看板が掛けられている。防犯の主な対象は農村からの民工だ。

廃品回収の仕事の關係でよく顧客の家に訪ねた香香は、いつも頑丈な防犯扉の外に待たされていた。彼女の印象では、都会のどこに行っても、防犯扉の向こうには怖い主婦がいて、「泥棒を警戒するように彼女のような農村出身の人を警戒している」。香香を締め出した重い防犯扉は、農村出身者を差別する都市社会の象徴とも言える。この扉は香香たちの前に立ちふさがり、彼女たちを社会の周縁に締め出し、都市社会の一員として社会生活に参入することを拒む。

『女傭』の主人公杜秀蘭は、都会を水、自身を油に喩え、「自分はまるで油のように都会という水に溶けこめない」と嘆く。農村から来たという理由だけで、彼女は近所の人々に泥棒のように扱われる。『女傭』には次のこと

が描かれている。一階に住む張家の鍋が台所から消えたことと、張のおばあさんは疑いの目を杜秀蘭に向けた。作者はこう描く。

杜秀蘭が買物籠を持って通りかかるのを見て、張おばあさんは大きな声で「ちよつと」と叫んだ。杜秀蘭はぶるつと震えて、誰を呼んでいるか分からないが、足を止めた。

「お前、うちの鍋を取っただろう」。杜秀蘭はわけが分からな顔で張おばあさんをぼうつと見ていた。すると、張おばあさんはすごい剣幕で問い詰めた。「そんなおとなしそうな顔をしても無駄よ。お前以外誰が盗ると言うの」。杜秀蘭の胸に痛みが走った。(中略)彼女は大きな声で叫んだ。「あなたたちはいつも私を泥棒のように扱うけど、私は人の針一本も盗ったことはない!」。

このような状況のなかで、社会生活や人との交流はもとより、人々の疑いの目、軽蔑のまなざし、意味深長な笑顔を恐れて、杜秀蘭にとっては、買物だけの外出も苦痛になる。彼女は雇い主の家に完全に孤立させられ、毎日寝たきり老人のベッドの前に座り込み、無言のまま日々を過ごす。彼女の境遇を作者は同情を込めて、「残酷にも都会に拒否されている」と表現する。

同じようなことは『二的』の主人公小白の身にも起きて

いる。「二的」には次のことが描かれている。小白は雇い主からきれいな服をもらった。彼女は早速それを着て買い物に出かけた。

人人は買い物袋を提げて町をしなやかな姿で歩く小白を振り向いた。自分がうらやましいのだ、だってこれは雪姉さんが着ていた服だものと小白は思った。(中略)しかし、都会人の表情がだんだん読み取れるようになってから、人々が自分に向けたのは羨ましきまなざしではなく、あざけりのまなざしだ、都会人は自分を馬鹿にしているのだと小白はやつと分かった。

同じ服は、都会人が身に纏えば高級感があつても、農村出身の小白が着ると人々の目には滑稽にしか映らない。小白に投げかけたまなざしに、読者は「貧乏な田舎もののくせに」というメッセージが読み取れるのではなかるうか。

以上の例をまとめてみれば、都市部にいる保母たちの社会的境遇がよく窺える。農村から来た保母たちは、「あざけりのまなざし」のなかで、都会で生活しながらも都市社会の一員として受け入れられず、さまざまな偏見とそれによる差別を受けている。多くの保母はこのような差別による屈辱と孤独な思いを抱えながら、都会の周縁に生きることを強いられている。

上記のような社会からの差別のほか、雇い主の家庭からの差別も見逃せない。住み込みで働く保母たちにとって、

雇い主の家は職場であり、私生活の場でもある。したがって、雇い主との関係が非常に重要になる。しかし、作品にみる保母たちと雇い主の関係、および彼女たちの雇い主の家庭での境遇は決していいとは言えない。

『二的』の主人公小白は保母として働き始めたころ、雇い主の単自雪に感謝の気持ちでいっぱいであった。単自雪は、着替えも持たずに都会に出てきた彼女に、日用品や衣類一式を揃えたばかりでなく、家電製品の使い方、家事や生活のいろいろな常識も教えた。小白にとって、単自雪は「彼女を田舎の娘から少しずつ都会人に近づく道を教えてくれた」人である。しかし、小白の感謝の気持ちが反感に変わるまでそれほど時間が掛からなかった。

大学法学部卒の単自雪は、貧しい農村から来た中学校中退の小白を心底見下している。彼女は刻薄な言葉と態度で自分の軽蔑をあらわにし、小白の仕事に対してもさまざまな要求を突きつける。保母として単自雪の家にいる自分の状況を小白は次のように認識している。

小白は自分が単自雪に見下げられていることをよく知っている。見下げるなら見下げた方がいい。私たち田舎の人間が都会にやってきたのはお金を稼ぐためだ、平等に扱ってくれとは思っていない。

自分は雇われている身だ。指図通りしなければならぬ。反発する余地なんかまったくない。



右記の引用に見られる「見下げられている」と「指図通りしなければならぬ」という表現は、保母たちの雇い主の家庭での位置づけを的確に表していると思われる。住み込みという形で働いているため、保母たちは雇い主の家族と四六時中生活をともにせざるを得ない。表向きは家族同然であるが、実際は自分の生活空間がまったくなく、プライベートもないのと同然である。たとえば『二的』にはこのようなことが描かれている。保母小白は歌が好きで、鼻歌を歌いながら家事をしたことがあった。すると、雇い主の単自雪は録音した小白の歌声を流し、こう言い捨てた。

「あなたは自分がどれだけの音痴か、本当に知らないの」。

小白は唾然とした。単自雪は悪辣すぎる。毎日本人の声を録音する人と一緒に生活するなんて、本当に恐ろしい。

また、自分の労働で収入を得、生計を立てることから言え、保母はれっきとした職業であり、雇い主との関係も雇用関係である。人格上両者は対等の立場にある。しかし、雇い主の家に住み込み、その身の回りの世話などをするという二点から、保母を職業とする認識が薄く、保母たちは「一人の家に身を寄せ、人の釜の飯を食べている」と見られている。雇い主と保母の関係も一般の雇用関係と違うところがあって、雇い主はあたかも保母の「主人」のよう

に思われている。そのため、人格的にも保母たちは対等に扱われていない。「自分の身分をわきまえ」、「お前は保母だろう」といったような文句は、本稿が論じるいずれの作品のなかにも見られる。たとえば、『傻女香香』の主人公香香は、後に夫になる劉の家で、保母としてのはじめての朝を、「お前は保母だろう、朝ごはんを用意しろ」という劉の怒鳴り声のなかで過ごした。

『女傭』の例を見ると、保母杜秀蘭が介護をしている老人金おばあさんは、杜秀蘭が自分の前で笑顔を見せたのを見て、「私の前で笑うな、自分の身分をわきまえることも知らないで」と怒ったことが描かれている。寝たきりの金おばあさんは杜秀蘭とほとんど口を利かないが、「お前は女傭だ」という言葉は彼女の口癖になっている。

女傭は旧時の下女や女中を意味する言葉である。女傭になった経緯に人身売買が多いため、女傭という言葉には、主人の家に隷属する「奴婢」のイメージが強く、長工（地主の常傭の作男）とともに旧時の財産家に威圧される貧しい人の象徴的な存在だったとも言える。たとえば、長工の父親が借金や地租が払えないために、娘が弁済の充てに地主の家の女傭にさせられ、苦難に陥るといような話は近代中国文学の中に多く見られる。そのため、一九四九年社会主義中国が成立してから、女傭という言葉はほとんど死語になり、そのかわりに「保母」が使われるように

なつたと思われる。「女傭」に描かれた人物金おばさんの「お前は女傭だ」という口癖は、「女傭」の主人公杜秀蘭のみならず、社会と家庭両方における保母全体の位置づけを象徴している。彼女たちの「卑しい身分」はこの言葉で明らかにされている。

単に物質的な面から見れば、保母たちの都会での生活は農村と比べて楽なものであり、日常生活も農村にいる時と比べものにならないほどよくなっている。保母の仕事も畑仕事と比べれば手軽なもので、「楽して毎月五〇〇元が稼げる」<sup>(34)</sup>。しかし、精神的な面から見れば、保母たちの生活は決して楽ではない。このことは作品を通して浮き彫りにされている。たとえば、「女傭」の主人公杜秀蘭は、保母になつてから日に日にきれいになつてくるが、心は「コンクリートのようになつてくる」<sup>(35)</sup>。作者は杜秀蘭の心理を次のように描く。

杜秀蘭の頭は女傭という言葉でいっぱいだ。田舎で請負いの畑を耕作していた時、彼女は畑の主だった。好きなやり方で作りたいものを作る。彼女は壮、壮さ<sup>ヂユウ、ヂユウ</sup>んちのおかみさんと呼ばれていた。しかし、都会では彼女は女傭だ。人の指図を受け、その通り動かなければならない。金の家に身を寄せている限り、金家の人に従わなければならない。<sup>(36)</sup>

農村では生活が大変であるが、一人の人間として尊重さ

れ、自由に生きていられる。都会では生活は楽になるが、卑しい身分の「女傭」の立場に甘んじ、それによる精神的な苦痛に耐えなければならぬ。杜秀蘭が感じたこのようなジレンマと精神的な苦しみは、もう一つの作品『二的』のなかで主人公小白の苦しみとしても描かれている。

辺鄙な山間地帯にいる小白は自分の主人だった。しかし、ここでは違う<sup>(37)</sup>。

それがゆえに、今より妹二的と戯れた貧しい田舎での生活の方がずいぶん楽しいものだったと小白は思う。

以上をまとめてみれば、保母たちは、農村出身の身分の卑しい人間として、社会と家庭の二重の偏見と差別を受けながら、都会の周縁に生きている。彼女たちは都市社会から隔離され、孤独な毎日を過ごす。しかし、たとえ偏見と差別を受け、それによって精神的な苦痛を感じながらも、保母たちが都市部にとどまるのはなぜか。それはやはり貧困と経済格差に理由が求められよう。「都会は彼女たちに刻薄だと言うなら、農村は残忍だと言わざるを得ない」。この表現は多くの若い農村女性を保母として生み出す原因を言い当てていると言えよう。

### 三 保姆たちの現実

#### (一) 小白の夢と現実

保姆の多くは若い女性のため、日常生活をもにする男性雇い主にとって、興味の対象になりがちである。一方、保姆は都会の各家庭に孤絶され、社会とほとんどつながりのない孤独な毎日を送り、男性と出会う機会もほとんどない。彼女たちにとって、男性雇い主は一番身近な男性であり、触れ合う機会が多い唯一の男性とも言える。このような状況のなかで、若い彼女たちは容易に男性雇い主に好意を持ち、恋心を抱くようになる。感情問題、さらには雇い主との性的関係は若い保姆たちが直面させられる一つの大きな問題になっている。この現状は文学作品に浮き彫りにされている。本節では、『二的』という作品の分析を中心にこの問題について述べてみたい。

『二的』の主人公小白は雇い主との間に関係を持っていった。結果的に見れば、彼女は相手に感情をもてあそばされ、傷つくことになる。しかし、そのような関係を持ったのは、彼女自身がある種の期待を持って望んだものとして描かれている。

前述したように、小白は雇い主聶凱旋の家で、刻薄な

女主人の指図を受けながら毎日を過ごしている。家族と離れて暮らす寂しさと日常の辛さから、小白は温和な聶凱旋に人知れず憧れ、次第に二人の間に何かが起きることを期待するようになる。家で来客と談笑する聶凱旋の姿を見て、小白はこう思った。

凱旋兄さんは五〇近くの人にはぜんぜん見えない、まるで学校に通っている子供のようだ、しかも優等生ね。でも、凱旋兄さんは弁護士なんだ。自分とこの人が特別な関係になる可能性だって存在する。そう思うと、彼女の胸はどきどきする。

右の引用から、小白の聶凱旋に対する思いが窺える。一方、このころ聶凱旋はまだ小白のことを意識しておらず、彼女の思いはまったく一方的なものと言わざるを得ない。「自分とこの人が特別な関係になる可能性だって存在する」という描写には小白の期待が読み取れる。しかし、小白の期待は聶凱旋と「特別な関係」になることよりもっと大きなものがあつた。帰省で実家に帰つた小白は次のように思つた。

今回の里帰りは都会に残りたい小白の気持ちをもっと強くした。実家にはもう帰れないと彼女は思つた。また、作品には次の描写もある。

小白が聶家での仕事をやめたいのは、聶家の秘密を知つたからだ。単白雪は見た目は強そうだけど、聶

家では孤立しているということだ。<sup>①</sup>

この家族はどうせ変わることを小白は知っている。彼女にできるのは静かに待つことだ。<sup>②</sup>

右記の三つの引用と、「特別な関係」云々の引用を合わせて考えると、次のような解釈ができると思われる。都会に残りたい小白は弁護士轟凱旋と「特別な関係」を持つことを期待する。そして、轟凱旋夫婦の仲が悪いことを知り、自分にチャンスがあると思い、轟家に留まる。つまり、轟凱旋との「特別な関係」を期待する背後に、「都会に残りたい」というさらに大きな期待があるのである。轟凱旋との結婚を利用し、本当の都会人になることを実現しようとする小白の思惑は、次の描写で裏付けられる。

初めは小白の存在を意識していなかった轟凱旋は、次第に小白の若さと美しさに魅かれるようになる。そして、小白の気持ちに気づいた後、それをいいことに、彼女と関係を持つようになる。轟凱旋にはじめて抱きしめられた時、小白は緊張のあまり本能的に反抗した。しかし、その後、彼女は深い後悔に陥るのである。

さつき無意識に反抗をしなければ、(中略)自分のこれからの運命は変わったかもしれない。単自雪と轟凱旋の夫婦関係はもう終わりで。(中略)轟凱旋は私を愛している。それなら、轟凱旋と単自雪の離婚、その後、再婚、すべてが自然の成り行きではないか。そう

すれば、私は永遠に暖房もなく、お湯も出ない悪夢のような田舎生活を離れ、好きでもない男と結婚し、次から次へと子供を生む生活をするかわりに、優雅な都会人の生活をする事ができる。(中略)しかし、この夢は今、自分の手でぶち壊された。私は本当に馬鹿だ。<sup>③</sup>

右の引用から小白の大きな期待が読み取れる。それはつまり轟凱旋との結婚によって都会人になることである。彼女がこの期待を現実にするために、若さと美しさを武器に轟凱旋を誘惑することは作品には書かれていない。彼女の轟凱旋への気持ちはむしろ純粹なものとして描かれている。しかし、右の引用から、彼女の純粹な気持ちの背後に、轟凱旋との結婚を利用して自分の運命を変えようとする思惑があることも否定できないと言える。

しかし、現実には、弁護士夫人になって本当の都会人になるという彼女の夢とは程遠いものである。二人の関係はやがて発覚し、轟凱旋は妻単自雪に問い詰められる。その情景を作者は次のように描いている。

小白はピンと背筋を伸ばし、勇敢と期待のまなざしで轟凱旋を見つめていた。彼女は轟凱旋にそのまなざしから自分の気持ちを読み取ってほしかった。(中略)しかし、自分の心のなかで神のような存在だった轟凱旋は、単自雪の詰問に対し、自分の弁解ばかりしてい

た。彼はすべてを否定した。きれいさっぱり<sup>(44)</sup>に。

そして、小白のことで喧嘩した日の夜、聶凱旋夫婦はわざとらしい親密振りを見せた。さらに、聶凱旋の本心を知り、彼の言動に強いショックを受ける小白に単自雪はこう言った。

あなたのために忠告するが、結婚した男の言葉は嘘に等しいのよ。嘘を信じ込んで傷だらけになるのは、男の責任ではなく、女の責任だよ。<sup>(45)</sup>

単自雪の言い分はさておき、聶凱旋が小白を嘘の言葉で騙し、彼女の感情をもてあそんだとしたら、小白はなぜ騙されたのか。また、自分と単自雪との間で聶凱旋が必ず自分を選ぶという小白の自信はどこから来たものであるのか。

小白のみならず、多くの保姆たちは家父長制度が根強い農村に生まれ育ち、幼い時から「女」として育てられてきた。女は勉強しなくてもいい、若いうちにいい男を見つけ、結婚するのがすべてだと彼女たちは言い聞かされてきた。弟を小学校に入れるために中学校を中退させられた小白の経歴はそのよい例と言えよう。小白たちの意識のなかでは、女性の価値のすべては若さと美しさ、そして健康な体にある。女性の魅力がそれだけではないことを、彼女たちは思いもしない。このことはもう一つの作品『米粒児<sup>ミーリヤル</sup>的城市』の主人公米粒児によく反映されている。

米粒児は、保姆をしている曹家の女主人侯老師がお金をたくさん稼ぐ曹老師の妻としてふさわしくないとと思う。侯老師は若くもないし、きれいでもないからだ。

侯老師は背が高くくてやせているうえ、胸も小さい。

(中略) 侯老師が小さい胸で子供に母乳を与えるのを見るたびに、こんな奥さんをもらって、曹老師は本当に損をしたと米粒児は思う。彼女は自分の大きく膨らんだ胸を見て、子供に必要なのは自分のような母親だ<sup>(46)</sup>と思う。

米粒児はどうしても侯老師がきれいだと思えない。

(中略) それにスタイルも悪い、両足はまるでコンパス<sup>(47)</sup>のようだ。だから、曹老師が彼女と結婚したのは、彼女が好きだからではなく、ほかにいい人がなかったからだ<sup>(48)</sup>と米粒児は思い込んだ。

以上の引用は、女性に対する米粒児の価値観をよく表している。彼女は自分を侯老師と比べた結果、「侯老師は私に負けている」という結論を出す。そして、曹老師が偶然彼女の入浴姿を見て、興味を示した時、彼女は曹老師が本気で自分が好きになったと思ひ込む。

米粒児と小白は違う作品に描かれた二人の人物である。しかし、二人の生い立ちや生活環境、および共に保姆をしていることなどにおいて、境遇は同じである。したがって、米粒児の例は小白という人物の分析をするにあたって

参考すべきだと思われる。言い換えれば、小白も米粒児と同じような価値観を持っていることが考えられる。

小白と米粒児の女性に対する価値観は、ほかでもなく家長制度におけるジェンダー規範であると言えよう。前述した小白の「自信」はまさにこのようなジェンダー規範によるものと思われる。

一方、小白たちのような農村女性と違って、いい教育を受ける機会が得られる都市部の女性は、学校ではもちろんのこと、家庭でも将来自立できる女性として育てられてきた。たとえば、聶凱旋との離婚が時間の問題だと小白に思われている単自雪は、専業主婦であるものの、大学の法学部を優秀な成績で出ており、「夫の希望で専業主婦になつていなければ、とつくに敏腕弁護士になつてい<sup>(4)</sup>る」。また、自分に「負けている」と米粒児に思われている候老師は、市教育委員会に表彰されるほどの優秀な教師であり、職場で優れた業績を挙げている。女性の魅力と価値の一面が若さと美貌にあるとしても、現代社会に生きる男性にとって、とくに聶凱旋や候老師のようないわゆるエリート男性にとって、豊かな教養と才能を持ち、仕事ができる自立した女性がより輝かしくみえることもあるのを、単自雪や候老師のような女性は心得ている。言い換えれば、遊び相手としてはともかくとして、自分の夫が本気で小白や米粒児たちのことを好きになることはありえないと彼女たち

は思っている。このことは、夫との関係が発覚した後も、単自雪は小白を解雇せず、依然保母として家で働かせた『二的』の描写で裏付けられる。単自雪のこのような対処と態度は、彼女にとって小白の存在は脅威にならないことを物語っている。

小白が相手を信じ、身も心も捧げた挙句に捨てられ、傷ついた責任は、無論無責任な男性にあらうが、一方で、上述のジェンダー規範にとらわれた小白自身にも反省すべきところがあるのでなかろうか。ただし、古いジェンダー規範にとらわれること自体の責任を小白に求めてはならないことを付け加えたい。

## (二) 杜秀蘭の悔やみ

以上述べたような感情の葛藤を保母たちが直面させられる一つの大きな問題だとすれば、金銭の誘惑はもう一つの大きな問題と言える。この節では、『女傭』の主人公杜秀蘭の例を中心にこの問題について述べてみたい。

『女傭』の主人公杜秀蘭も『二的』の主人公小白と同様、雇い主と性的関係を持った。しかし、小白は自ら望んでしたのに対し、夫を持つ杜秀蘭は雇い主に乱暴されたことから関係を持ち続けたのである。

「『一 作品内容の紹介』で述べたように、杜秀蘭は寝たきり老人の介護に雇われた。まだ若くてきれいな彼女は老人

の息子の興味を引く。息子宝良は杜秀蘭がうとうとして  
いる隙を見て彼女に乱暴し、性的被害を受けた杜秀蘭は悲  
しみにくれる。作者は次のように描く。

涙がほろほろと落ちた。杜秀蘭は声もなく泣いた。彼  
女の頭は「貞操を失った」という羞恥心でいっぱいにな  
った。(中略)貞操を失うことは一番恥じるべきこ  
とだ、人に知られたらもう堂々と生きていられない。  
彼女は自分を守ろうと宝良を訴えと言った。しかし、  
宝良が差し出したお金を見て、彼女の心情は変わった。

事はすでに起きた、これからまた金兄弟に飯を食わせ  
てもらわなければならぬ。ここを追い出されたらど  
こに行けばいい？ 彼女の手に握られた人民幣は強烈  
な質感があった。これは補償だ、失ったものへの補  
償だ。

このようにして杜秀蘭は屈辱を感じながらもお金で問題  
を解決しようとする宝良の取引に応じたのである。杜秀蘭  
も「二的」の主人公小白と同じように、家長制度が根強  
い農村に生まれ育っており、そのうえ夫と子供を持つ身で  
ある。彼女の道徳規範では、女性が貞操を失うことは最も  
許されないことのはずである。右記の引用に見られる「貞  
操を失うことは一番恥じるべきことだ、人に知られたらも  
う堂々と生きていられない」という表現はそのことを物  
語っている。しかし、このような考え方を持つ杜秀蘭は、

こともあろうに自分に乱暴した男のお金を受け取って、そ  
のうえお金のために相手と関係が続けたのである。このこ  
とから彼女にとって金銭がどれだけの誘惑になっているか  
が窺える。しかし、杜秀蘭の金銭に対する欲望の背後に  
は、保母としての辛さがあったのである。夫と離れ、社会  
との交流もなく、介護する老人に差別され、さらにその息  
子に乱暴される辛い境遇のなか、杜秀蘭はこう思った。

杜秀蘭は自分がとても不幸だと思った。この不幸から  
脱出するには、本当の都会人になるしかない。

都会で家を買えば、臨時都市戸籍がもらえ、何年かすれ  
ば正式の都市戸籍に変更することができることを知り、彼  
女は都会で家を買うという目標を目指すようになる。しか  
し、保母の収入と建築現場で働く夫の収入だけでは、家が  
買えるはずもない。都会人になるため、そして息子に都会  
の子供が着る学校の制服を着せるために、彼女はお金を求  
めて宝良と関係を持ち続けた。そのうえ、保険外交員の宝  
良に顧客の相手になってくれと言われた時も、彼女は断ら  
なかった。お金がどんどん入ってくるにつれ、杜秀蘭は目  
標に少しずつ近付き、羞恥心もだんだん薄くなる。彼女は  
「五〇〇回宝良と寝れば、この都市で家を買うのに必要な  
一〇万が手に入る」という計算さえするようになる。

しかし、貞操を失ったことへの屈辱感と劣等感、夫への  
罪悪感はずっと彼女を苦しませる。彼女の気持ちは道徳と

欲望の間で揺れる。

断れと杜秀蘭は自分に命令した。しかし、懐のお金はだんだん重くなつて、彼女が断れないように引つ張つている。

この引用は彼女の心の葛藤をよく表している。そして、彼女はお金をもらうと、「札を頬に当て、涙を流した」。「札を頬に当て、涙を流す」という描写は簡単であるが、杜秀蘭の苦しみと悔恨をリアルに伝えていると言えよう。杜秀蘭は屈辱と引き換えに都会で家を買ふのに必要な頭金を手に入れた、しかし、彼女の夫への罪悪感、心の痛みは永遠に消えないだろう。杜秀蘭のしたことは売春行為に等しいことで、許されるものではない。しかし、彼女にそうした都市部と農村部の経済格差、および保姆の辛い境遇はけつして見逃すべきではないと思う。

## おわり

以上、保姆たちの日常を描く作品『女傭』、『傻女香』、『二的』、および保姆経験者を主人公とする『米粒児的城市』の分析を通じて、これらの作品に描かれた保姆の同情すべき境遇を明らかにした。総じて言えば、本稿の「二」保姆たちの境遇」で述べたように、多くの若い農村女性が保姆になった背景、また彼女たちが都市部で

さまざまな偏見と差別を受ける背景には、都市部と農村部の大きな経済格差と、その格差から生まれる社会認識の問題がある。広く言えば、この問題は、保姆のみならず、都市部で働く農民工全体が直面している問題でもある。その一方、保姆という職業の特質を考えれば、ジェンダーの問題抜きで保姆の境遇を論じることができない。

本稿の「三」保姆たちの現実」で、『二的』に描かれた小白と『米粒児的城市』の主人公米粒児の例を通して、都市部と農村部の女性の間に見られるジェンダー意識の違いについて述べたが、女性の価値に対する認識はその違いの現れと言えよう。若さと美しさは女性の魅力のすべてという古いジェンダー規範にとらわれるがゆえに、若い保姆たちは、恋愛問題で傷つき、ただでさえ厳しい現実にとさらに辛い思いが加わることになる。『二的』に描かれた小白の轟凱旋に対する「恋」の結末はそのよい例であろう。

しかしその一方、男性が女性に若さと美しさを求めるのも事実である。本稿の文中で明らかにしたように、轟凱旋や曹老師のような妻子を持つ男性も、若い保姆に興味を示し、「恋愛関係」を持つことに至る。彼らの言動は、古いジェンダー規範に基づいた女性の「価値」を確認する機会を保姆たちに提供した。また、『傻女香』には、二〇歳年上の男性との結婚によって願ひ通り都会人になった香の姿が描かれている。香の「成功」は、美貌と若さ



という女性の価値を実現した例として受け止められよう。さらに、状況は違うものの、『女傭』の主人公杜秀蘭が短期間で都会に残る手段としての住宅購入の頭金を手に入れたのも、「女」を利用したからである。これらの例は、古いジェンダー規範が農村部の女性にのみならず、中国社会全体にまだ残存していることを物語っている。『二的』の主人公、若い保姆の小白のように、農村から都会に出て、さまざまな影響を受けながら、また恋愛問題で傷つきながらも古いジェンダー規範から抜け出せないのは、このような現実があるからではないかと思われる。

無論、文学作品はフィクションであり、現実そのものではない。しかし、現実を反映していることは否定できない。この意味で、本稿に取り上げられた四作品は、中国社会における保姆たちの境遇を浮き彫りにしたうえ、その境遇をめぐって、根本的に改善すべきところが大きいあることを私たちに提示してくれた。

## 注

- 〔1〕 関西中国女性史研究会編『中国女性史入門』〔IV〕2 家事労働』（人文書院、二〇〇五年）参照。
- 〔2〕 畢淑敏『女工』六四頁。原文引用は『二〇〇四—二〇〇五 中国文壇最佳人氣小説作家榜』（文化芸術出版社、二

〇〇五年）による。日本語訳は筆者。以下同。

〔3〕 『女工』六四頁。

〔4〕 注（一）に同じ。

〔5〕 新華網 <http://www.xinhuanet.com/>

〔6〕 西安新聞網 <http://www.xawb.com/>

〔7〕 原文引用は『小説月報 第一二届百花獎獲獎作品集』（百花文芸出版社、二〇〇五年）による。日本語訳は筆者。以下同。

〔8〕 原文引用は『小説月報』二〇〇五年第五期による。日本語訳は筆者。以下同。

〔9〕 原文引用は『北京文学』二〇〇五年第八期による。日本語訳は筆者。以下同。

〔10〕 『傻女香香』三七二頁。

〔11〕 同右。

〔12〕 同右。

〔13〕 『傻女香香』三七三頁。

〔14〕 『二的』三六頁。

〔15〕 同右。

〔16〕 『女傭』一四八頁。

〔17〕 『二的』三四頁。

〔18〕 遠山日出也『最近の中国における女性労働問題をめぐるさまざまな女性たちの動き』（『女性学年報』二六号、二〇〇五年一月）参照。

〔19〕 前掲『中国女性史入門』〔IV〕7 改革開放下の農村女性』参照。

〔20〕 注〔18〕に同じ。

〔21〕 農民工とも言い、都会に来る農村からの出稼ぎ労働者を指す。

〔22〕 『傻女香香』三七一頁。

〔23〕 『傻女香香』三八二頁。

〔24〕 『女傭』一四四頁。

〔25〕 同右。

〔26〕 『女傭』一四五頁。

〔27〕 『二的』三〇頁。

〔28〕 『二的』二九頁。

〔29〕 同右。

〔30〕 『二的』三〇頁。

〔31〕 『二的』三九頁。

〔32〕 『傻女香香』三九四頁。

〔33〕 『女傭』一四五頁。

〔34〕 『二的』三〇頁。

〔35〕 『女傭』一四四頁。

〔36〕 『女傭』一三四頁。

〔37〕 『二的』三二頁。

〔38〕 『傻女香香』三七四頁。

〔39〕 『二的』四〇頁。

〔40〕 同右。

〔41〕 『二的』三〇頁。

〔42〕 『二的』四六頁。

〔43〕 『二的』四二頁。

〔44〕 『二的』四八頁。

〔45〕 同右。

〔46〕 『米粒兒的城市』一五頁。

〔47〕 『米粒兒的城市』一六頁。

〔48〕 同右。

〔49〕 『二的』四八頁。

〔50〕 『女傭』一四八頁。

〔51〕 同右。

〔52〕 『女傭』一四九頁。

〔53〕 同右。

〔54〕 同右。

〔55〕 『女傭』一四八頁。